
伝文

日本口承文芸学会 会報

第77号 2025年9月 発行

日本口承文芸学会

〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28

國學院大學文学部 立石展大研究室

Tel: 03-5466-4460

E-mail: info@ko-sho.org

五十年目の宿題

伊藤 龍平

日本口承文芸学会も設立五十年を迎える。半世紀、短くはない時間である。設立当初のことを知る先達からお話を聞き、五十年前と現在を比べてみると、まさに隔世の感がある。

五十年前といえば、高度経済成長の最中、生活スタイルが激変していくなかで、昔話伝承の危機が叫ばれていた。それと軌を一にして民話運動が盛んになった。民間説話の略語ではない、民衆の話としての民話は、形を変えつつ「新しい語り」へと接続していく。一方、「ディスカバー・ジャパン」の謳い文句に象徴されるように、日本のいわゆる伝統文化が脚光を浴びようになり、その過程で地域の伝説や神話、民謡に注目が集まった。都市民俗学が提唱されるようになると、欧米由来の都市伝説研究に誘発される形で、世間話が注目されるようになった。それは後年のネットロア研究へともつながっていく。また、戦前の研究からの連続であるが、アイヌや南島への関心も深まり、国際的な研究テーマも増えた。調査のスタイルも変わっていった。録音技術の進展によってカセットテープは小型化していき、やがて MD、IC レコーダーに取って代わられた。

思いつくままに挙げてみたが、これらの変化には、先人たちが予見できていたものと予見できなかったもの、予見はしていても対処できなかったものがあるだろう。そこに我々に託された宿題がある。その中から、学会として取り組むべきであろう宿題を二つ挙げる。

一つは、先人たちが遺してきた声の記録を、いかにして後代に伝え、そして公開するかという問題である。テープが経年劣化していくなかで、これは喫緊の課題となっている。

もう一つは、「口承文芸データベース」の開発である。この五十年の間に、『日本昔話大成』『日本昔話通観』『日本伝説大系』などのタイプインデックスが世に出て、我々はその学恩に浴している。しかし、これらの書籍が刊行されてから、すでに数十年の時間を経ている。その間に編纂された資料集も多いし、紙媒体による検索の限界もある。昔話、伝説に世間話を加え、さらには説話以外の各種口承文芸をも加えた広範なデータベースが必要とされている。

学会の規模を考えた場合、また、昨今の高等教育を取り巻く環境の厳しさを考えた場合、この二つの宿題に応えるのが容易なことではないのは承知している。だが、それでも、やらなければいけないことだとも思っている。時期はもう到来している。

(神奈川県)

追悼・小島瓊禮先生

繁原 央(愛知県)

令和7年5月13日、恩師・小島瓊禮先生が亡くなった。享年90歳。突然の訃報に動揺しつつ神奈川県愛甲郡愛川町半原のお宅にお伺いし、位牌に手を合わせた。

思い起こせば先生とは長い御縁をいただいた。大学に入ってすぐ近世文学会に入ったら、小島先生が顧問であった。久我山高校の教員のところで御多忙のなか國學院にきてくださっていた。そのころから柳田国男の晩年の弟子として民俗学が御専門だと伺っていたが、佐藤謙三先生の弟子でもあり、上代、中世の文学についても詳しかった。

大学院のころ小島先生を中心に比較民俗学研究会をやっていた。構造主義が流行っていたころで、レヴィ＝ストロースの翻訳が出だしていた。ある日、臼田甚五郎先生と小島先生が渋谷から大学に行く途中で、話しているのを脇で聞いていると、口承文芸学会について名称をどうするかと話されていた。やはりこの名称がいいですねと臼田先生に進言されていたように記憶している。昭和50年ころのことである。

先生のお宅にうかがうと、その時研究している話題を話してくれることが多かったが、時に、柳田国男について話されることがあった。柳田国男先生からいただいたカードを見せてくれたこともある。藁半紙四ツ切のカードに赤いインクで一枚ずつ資料をメモしてあり、「これは君にあげるから使ってくれたまえ」といってもらったものだといわれた。説話研究のカードだったように思う。小島先生は高校生のころから民俗学に志していたという。柳田国男の学問を継承しようという気持ちを強くもっていたようだ。

柳田国男は晩年、「昔話や方言などに熱を上げるんじゃないかった」と述懐し、「昭和三十年、八十歳に達した先生が、説話は説話学会にまかせ、民俗学会は信仰の研究をすべきである」といわれたと書かれている（『日本説話学会のこと』『比較民俗学会報』第1巻第1号、1980、5）。『遠野物語』や『桃太郎の誕生』などの著書をもつ柳田国男がそういったというのは、口承文芸学会が説話研究を



1987年オーストリア研修のころ
ドイツのマルクト広場のグリム兄弟の像
の前で

担うという意味を持っていたと思われていたのではなかろうか。

日本口承文芸学会が設立されたのは昭和 52 年 5 月であるが、その年の『日本民俗学』112 号 (9 月発行) で「日本民俗学の研究動向」という特集が生まれ、そこに小島先生が「口承文芸研究の課題」と題する論考を書いている。

その論考の書き出しは「口承文芸の分野にかぎらず、日本の民俗学は、もう一度、根本から洗い直すべきときにきているようである」と相当挑戦的である。民俗学が科学としての基礎を築く時期にあることを強調され、「世界の民俗学の歴史を見ると、その主流をなしたのは口承文芸の研究であり、それはつとに比較民俗的な姿勢をとっていた。文献学とも表裏一帯であった。われわれは、口承文芸という、人類文化の本源的姿に近い素材から、文芸なり文化なりを考えようとしているのである」と指摘されている。

この論考を日本口承文芸学会設立に合わせて発表したことは、末尾に「新しく生れようとしている日本口承文芸学会の大きな任務になろう」と記してあることから明らかである。学会設立時の意気込みを感じさせてくれる。

その後の先生の著作活動は多方面にわたっているが、第 39 回柳田国男賞を受賞した『太陽と稲の神殿』（白水社）は日本人の信仰面についての民俗学的成果として評価されたものである。一方、説話方面の比較民俗学的成果はこれから書かれる予定であると聞いていた。それを拝見できなくなってしまったのは残念でならない。

第 87 回研究例会報告

2025 年 3 月 22 日 (土) オンライン (Zoom) にて開催

シンポジウム「叙事詩研究の現在と可能性」報告

熊野谷 葉子 (千葉県)

2025 年 3 月 22 日 (土)、日本口承文芸学会第 87 回研究例会が「叙事詩研究の現在と可能性」をテーマに、オンラインのシンポジウム形式で行われた。パネリストは丹菊逸治氏 (アイヌ叙事詩)、藤井真湖氏 (モンゴル叙事詩)、坂井弘紀氏 (テュルク叙事詩) の三名で、司会兼コメンテーターを熊野谷が務めた。はじめに熊野谷が「叙事詩とは」という問題提起を行い、日本口承文芸学会でこれまでに行われてきた叙事詩研究について簡単に紹介したのち、各パネリストが質疑を含め 40 分の報告を行った。その後全体ディスカッションを行ったが、発言が途切れず、予定時間を 20 分ほどオーバーして盛会のうちに終了した。

パネリストとして最初に登壇した丹菊氏の報告「アイヌ叙事詩の形式的制約」では、アイヌ叙事詩が一定の押韻構造に基づく定型句を中心に 3~4 行で 1 詩連を形成すること、詩連どうしは「橋」となる語句によって繋がれること、更に物語を構成する複数のエピソードはその連鎖形式におそらく有限のパターンがあることが報告された。丹菊氏によれば、アイヌ叙事詩の語り手はこれらの制約を前提に独自の演出を加えて語っており、それがアイヌ叙事詩の持つ独自の歴史性と語り手の個性に繋がっている。会場からは音韻やアクセントに関す

る専門的な指摘や具体的な語りのテキストの相違についてのコメントが寄せられ、アイヌ叙事詩研究の進展ぶりがうかがわれた。

二番目の報告は藤井真湖氏の「『元朝秘史』における英雄叙事詩的意味構造と聴覚的意匠—婚姻交渉に隠された毒のメッセージ」であった。藤井氏は既に多くの論考で『元朝秘史』には文章が示す明示的な内容と隠喩によって理解される非明示的な内容とが正反対に対応しており、それが英雄叙事詩的特徴であることを指摘してこられた。今回の報告は、チンギス・カンの父イェスゲイが息子の婚姻交渉を行う場面を取り上げ、花嫁の父デイ・セチェンの言葉に「毒のメッセージ」が隠されている可能性について論じたもので、両家を中心とする部族集団間の関係と、当該テキスト内の語句一つ一つが持つ意味的・聴覚的特徴とが語られた。

『元朝秘史』の二重構造に興味をかきたてられた聴衆から多くの質問が投げられた。

休憩を挟んで最後の報告は坂井弘紀氏の「『チョラ＝バトゥル』にみる英雄叙事詩の変容と評価・再評価」であった。中央ユーラシアのテュルク系諸民族に広く伝わる英雄叙事詩『チョラ＝バトゥル』は、16世紀にロシアが侵攻・征服したカザン・ハン国に実在した有力者チョラ・ナリコフを主人公とし、同国の滅亡を語る。報告によれば、この叙事詩は、ほぼ同一の定型句が東はカザフ草原やクルグス地方から西はクリミア半島やドブルジャ地方に至る広大な地域に分布し、伝播力の強さを実感させる。同時にストーリー上の相違があり、西方ではロシアとの戦いでチョラが死亡するのに対し、東方では主な敵集団は17世紀に東から中央アジアを襲撃したカルマクで、チョラは無事に帰還する。つまり叙事詩にはそれを語る集団の重要視する史実や歴史認識の違いが反映されるのである。坂井氏はまた、英雄叙事詩が民族のアイデンティティ形成に重要な役割を果たすこと、叙事詩の採録・刊行には政治的な思惑が絡んできた点を指摘し、今後の叙事詩研究の課題を示された。

以上三報告はいずれも現在の叙事詩研究の最前線を示すものであり、叙事詩の魅力と謎、その歴史性や口承文芸的特徴の研究の重要性があらためて確認された、有意義な研究例会であった。

第49回日本口承文芸学会大会報告

2025年5月31日（土）～6月1日（日） 於 北海道大学
対面及びオンライン（Zoom）にて開催

【公開講演】 2025年5月31日（土）

講演① 大谷 洋一 氏「私が聞いたアイヌの物語」

奥田 統己（北海道）

大谷洋一氏は、北海道立アイヌ民族文化研究センターが1994年に設立されると同時に研究職員として着任し、2015年に北海道開拓記念館と合併したのちの北海道博物館アイヌ民族文化研究センターを経て、大会直前の2024年度末に退職したばかりであり、大会当日の発表のタイトルには「1994年から2005年まで（34歳から45歳までの聞き取り調査）」と副題が

付されていた。大谷氏はまず自身の生い立ちを紹介したのち、とくに小川シゲノさん、上田トシさん、松島トミさんという3人の語り手との聞き取り調査の思い出にふれながら、ご研究を以下のように振り返った。

まず「オンネ パシクル（年寄りカラス）」という詞句で始まる歌のジャンル呼称と歌いかた（遊びかた）について、知里真志保は「ウパラパクテ（口競べ）」と呼ぶ早口言葉だとしているが、知里と同時代の記録でも大谷氏の調査でも、そうした呼称や早口言葉のような遊びかたの報告はないということを述べ、「知里真志保はほんとうに聞いたことがあるのだろうか」と疑問を提起した。ついで和人の昔話などがアイヌ文化に取り入れられたとされる「和人の散文説話」について、上田さんによる「お銀小銀」型の物語の語りを上田さんの姉の木村キミさんの録音と比較し、また久保寺逸彦が記録した和人の散文説話の分析も踏まえて、このジャンルには久保寺による整理とは必ずしも一致しない特質があることを述べた。さらに上田さんから河童の話を聞いたことに始まるアイヌの河童にかんする自身の研究について述べ、先行研究はさまざまあるものの「日本語による世間話」をデータに含んでいると批判して、アイヌ語の原文を伴う資料に限れば、和人の河童の伝承との違いは大きく、アイヌ口承文芸のなかで新たな河童イメージが作られているとした。

なお奥田も本学会の四十周年記念論文集で述べたが、河童などの魔物・妖怪の伝承が散文説話や神謡だけではなく伝説や世間話というジャンルでも語られることは当然であり、また近現代にアイヌ民族が置かれた状況を考えれば伝説や世間話が日本語で語られているからといって研究の視野から排除すべきではない。金田一京助以来、アイヌ口承文芸研究は主に言語学者によって進められ、現実から独立して完結する世界をアイヌ語で語る散文説話などのジャンルを重視する、いわば「アイヌ語至上主義」に束縛されてきたともいえる。大谷氏自身も最後に「現地のお年寄りの話を聞きに行くこと」の重要性を指摘したが、そこでも得られる「アイヌ語で語られなかった物語」に着目することが、これからのアイヌ口承文芸の視野を拡大するだろう。

講演② 荻原 眞子 氏「「口承文芸」ーシベリアからの再考ー」

中川 裕(千葉県)

荻原眞子氏は、シベリア諸民族の叙事詩について日本におけるパイオニア的な研究を半世紀以上にわたって進めてきた方だが、本講演ではその現状を踏まえ、さらに口承文芸研究全般におよぶ広範な視点からの総括を行った。

まずシベリアを中心とする先住民の口承文芸について、欧米的なジャンル分類の限界を批判的に検討した。ソ連時代、言語学者たちは少数民族の言語を記録し、読本や教科書を作成したが、その過程で「昔話」「伝説」「神話」といった分類枠を先住民に押し付けることが多かった。しかし、それらの分類は現地の語り手の実感に必ずしも即しておらず、誤解や混乱を生んだ。荻原氏はユーラシアの諸民族において、詠われる叙事詩と語られる叙事詩の区別があることを概観し、このような形式的な観点から民族ごとの語りを整理すべきだと提案した。

また、「英雄叙事詩」という語に含まれる「英雄」という概念に縛られることで、語りの本質が見失われると警告する。実際にシベリアの叙事詩では、英雄の誕生や活躍の仕方は非常に多様である。

さらに、語りの場としての宗教的・呪術的側面にも注目する。例えば、サハにおいては、狩の場に叙事詩オロンホの語り部が同行し、それを語ることで自然界の主（ぬし）から獲物を授けてもらうという信仰がある。それは語りが人間の生活と密接に結びついていたことを示している。語り手が元々神々や自然に対して語っていたという視点は、口承文芸の起源や本質を考える上で重要であり、ヨーロッパでも同じような世界があったのではないかという。

荻原氏はまた、記録された叙事詩が先住民族の若者たちにとって再学習の手段となっていることに希望を見出し、記録と伝承の両立の重要性を訴える。中国のジャングル研究センターのような若手育成の取り組みにも触れ、日本でも同様の場が必要だと述べる。

一方で、無形文化遺産登録には国家による制約があり、例えばジャングル叙事詩が登録されない背景には、モンゴルとロシアの間での伝承の重複などがあるという。また、言語政策による言語消滅の危機にも警鐘を鳴らし、ウイグル語やモンゴル語など、国家によって言語の使用が制限されている事例を紹介する。

最後に、IT社会の進展が音声言語を圧迫し、「話すこと」「語ること」の価値が失われつつある現状に強い危機感を表明する。語りは単なる情報伝達ではなく、人間同士の関係性や感情の共有を含むものであり、記録だけでは伝承とはならない。原爆体験や震災の語り継ぎなども含め、語ることの本質的な価値を見直す必要があると強調する。口承文芸学会が「口承」にこだわり続けることの意義は今こそ大きく、その存在に改めて強いエールを送って講演を締めくくった。

【研究発表】 2025年6月1日（日）

対面発表（前半）

今井 秀和（東京都）

富樫 晃 氏「寺田寅彦と怪異伝承の科学的分析」

大正から昭和初期にかけて活動した物理学者、寺田寅彦の随筆を分析対象とした上で、彼がいかなる目的で怪異伝承を扱っていたかに迫る発表であった。富樫氏はまず、「怪異考」などの随筆を著した寺田の専門が物理学であったことにより、これまで民俗学の分野ではあまり注目されてこなかったと指摘する。

寺田は言い伝えによって残された怪異伝承が、科学の発展に伴って、やがて説明可能な事象に成り得ると考えており、また、怪異伝承の事例を多く集めることの必要性をも説いていた。それは、目的は異なるものの、柳田による初期民俗学が心意研究として怪異の蒐集を志していたことと、方法論的に重なる部分を持っているという。井上円了もまた、目的は異なるが怪異伝承蒐集の重要性を認識していた。

富樫氏は、関東大震災、三陸津波の調査を通して寺田が展開していた防災への啓発活動に着目し、寺田による怪異研究の目的が、言い伝えを科学的に分析し、災害予兆を見出して被

害を軽減するという、きわめて実学的なところにあったと結論した。フロアおよびオンライン参加者からは、井上円了と寺田寅彦がそれぞれの活動をどのように捉えていたと考えられるかについて、また、寺田の文学上の師にあたる夏目漱石ら周辺人物の怪異観についてなど、重要な点についての質疑が交わされた。

菊地 暁 氏「道産子が民俗学を学んで『飛騨の民話』を編むまで—江馬三枝子の軌跡と作品—」

菊地氏はまず、自身の論考も含めた先行研究を整理した上で、明治36年（1903）、北海道に生まれた江馬三枝子（旧姓「富田」、本名「ミサホ」）の個人史を確認していった。そして、批評や小説、飛騨を題材にした民俗学的著作など——北海道出身者には民俗学ができないと述べていた柳田国男との距離感をも含めつつ——多面的な文筆活動が紹介された。

北海道に渡った元水戸藩士の父と、材木屋の娘だった母の間に生まれた三枝子は、大正15年（1926）に上京し、翌年、プロレタリア作家の江馬修（えま・なかし）と結婚。1928年には『若草』誌上に「アイヌの女」という小説を発表しており、そこには虐げられたマイノリティへの共感などが見られるという。

上京後はプロレタリア小説を発表するほか、フェミニズム批評も展開。さらに、昭和7年（1932）には運動弾圧から逃れる意味もあって修の故郷である飛騨高山へと移る。このことが、編集主幹をつとめた雑誌『ひだびと』や、『飛騨の女たち』（1942）、『飛騨の民話』（1958）などの著作に繋がっていく。菊地氏は、江馬三枝子の民俗学はプロレタリア運動の延長線上にあり、その根底には女性解放を目指すフェミニスト的課題があったと結論した。質疑応答では、戦前と戦後とで民俗学者その他における「北海道」の意味合いが異なっているのではないか、などの重要な視点が共有された。

対面発表（後半）

藤田 護（神奈川県）

田森 雅一 氏「インド民俗叙事詩における想起と再創造—ラーマーヤナとの関係を中心に—」

本報告では、まず叙事詩『ラーマーヤナ』の成立背景と物語の概略が説明され、それと関連させるかたちで、インドのラージャスターン州において、現代に民俗神への儀礼を司る「ボーパ」という非バラモン司祭の職能が成立しており、このボーパが砂漠の村々を回りラージャスターンに駱駝をもたらした民俗英雄神パーブージーの生涯と偉業を歌い語る「パーブージー叙事詩」を演唱することが述べられた。また、その際には、「パド」と呼ばれる大型の絵図を用いて演唱する「絵解き語り」の形態をとる場合があるとされ、その具体的な絵図とパフォーマンスの姿が示された。

そして、「パーブージー叙事詩」が展開した歴史的経緯についての説が示された上で、「パーブージー叙事詩」に『ラーマーヤナ』の登場人物が取り込まれたり、想起されたりすることが、幾つかの場合を挙げて示され、そのような民俗叙事詩における古典叙事詩の想起が、再創造の過程と言えるのではないかとの見通しが示された。

発表後に、会場からは、「パーブージー叙事詩」に『ラーマーヤナ』のエピソードや登場人物がとりこまれている背景をどのように考えるか、また「パーブージー叙事詩」の具体的なエピソードについての質問があった。総じて、極めて複雑かつ魅力的な口承文芸をめぐる動態を本報告に見てとることができ、実際の演唱の場面なども含めさらに詳しく知りたいと思わせる報告であった。

奥田 統己 氏「アイヌ口頭文芸の常套表現と韻律的類型」

本報告では、アイヌ口頭文芸の韻文ジャンルについて、これまでの研究には物語に固有なメロディーと詞句のアクセントの関係を検討する系譜があったと位置づけつつ、そこでのアクセントの傾向の観察結果がまとめられた。

そのうえで、詞句のアクセントについて、物語に特有のメロディーや語り手に特有のメロディーから独立したかたちで、言語としての詞句のアクセントのルールが見いだせるかという問題として、現在進められている一連の研究を位置づけ、近年の報告者による「音節数志向の韻律」と「アクセント志向の韻律」との区別をこの流れに位置づけた。そのうえで、丹菊逸治氏による行頭での母音の一致の指摘について、これが常套表現がもつ特徴によるものではないかという仮説の下に、筆録資料である久保寺逸彦『アイヌ叙事詩—神謡と聖伝の研究—』の神謡をもとに、常套表現における韻律が集計され、結果として常套表現においては4音節以下の行で行頭アクセントが有意に多く現れ、上述の「アクセント志向の韻律」の存在が想定できるという見解が示されるとともに、この傾向を担う常套表現には内容的なものではなく機能的なものが多いことが指摘された。

オンライン発表

伊藤 慎吾(埼玉県)

小池 淳一 氏「〈声〉の可能性—津軽における昔話伝承資料から—」

津軽地方をはじめ、青森県域の口承文芸調査に長年尽力した佐々木達司(1932-2020)は、1970年代から2010年代にかけておよそ40年にわたる音声資料(カセットテープやMD)を遺した。複製技術や電子媒体の発展を利用することで、それらは今後の学術研究の資料になり、また地域社会に還元することもできる。そうした考えのもと、本発表は〈声〉の可能性を模索したものである。

まず〈声〉をめぐる問題を技術環境的、学術理論的、社会的倫理的の3つのレベルに整理する。このうち特に学術理論的なレベルが掘り下げられていった。その観点から、「話型」分析の実例を示しながら口承文芸がどのように〈声〉となるのかを検討した。「話型」は「語り手と聞き手の双方向の刺激によって姿を現す過程が刻まれたドキュメント」であり、またひとつひとつの「話型」が想起され、語りとして起ち現れる調査の場を「語り手の一種のパフォーマンス」として発表者は捉えている。

また、音声資料は調査当事者以外も利用できるようにデジタル化を進め、複数の媒体に保管することが必要であり、これらの資料を活用し、さらに画像・映像資料等と組み合わせる

ことで地域文化のシステムを構築するなど、文化資源としての活用の可能性を示した。

西座（谷口） 理恵 氏「昔話「狐遊女」の周辺」

発表者は口承文芸における女性と「狐」の関係をテーマとする研究の一環として、大阪府和泉市の信太地域における「信太狐」伝承の論文を昨年発表した（『草莽の語り』3、2024）。今回は、それを踏まえて昔話「狐遊女」における女性と「狐」の表象について考察したものである。

まず、各地の事例 59 例を分析し、「狐」が「遊女」に化ける契機に「報恩」が最も多いことを指摘する。また、「猫」が愛玩動物であることから、「狐」の代替として、育ててもらった恩に報いて遊女や芸者に化ける話も散見されるという。「狐遊女」は地域的には新潟県が多いものの、そもそも話数自体は多くなく、話も個々の事例に異同が大きい。西日本の伝承では地名や実在の遊里の名が取り入れられる割合が増え、創作話のように話の筋が複雑であり、さらに昔話の世間話化や伝説化も見られる。そして、信仰との関わりという点では、「狐」の招福性を指摘する。

「狐遊女」の報恩の方法は、人が人を売って対価を得るものであるため、女性を遊里や茶屋に売る組織的な場が前提となる。そしてそれらに身を売る行為を「孝行」として受け入れる社会通念を背景として、この昔話は成立している。したがって社会的靈性を備えた女性像のうかがえる「狐女房」とは異なり、「狐遊女」の場合は、近世期に選択の自由がなく遊女となった女性たちのイメージが色濃くうかがえるという見解を提示している。

なお、発表者は本発表の後、「狐火」伝承の諸相（『草莽の語り』4）を発表している。

藤井 倫明 氏「テーブルゲームのルールに関する一考察」

テーブルゲームのルールは口伝えで広まり、各地域で変化したと考えられることから、本発表ではテーブルゲームを口承文芸の一種として捉え、そのルールの伝承の在りようを考察したものである。

発表では、民間発祥であり、作者不詳の「坊主めくり」と『UNO』を分析対象とした。2つに共通するのは、完全に口承で伝えられたゲームであること、成文化されたルールがありながら口承によってルールの変化したゲームであることである。この2つのゲームをめぐって、2023 年から 24 年にかけて大学生を対象としてアンケート調査を実施し、それによって得られたデータを分析、考察している。

それぞれのゲームのデータ分析を通して、ローカルルールが広まった理由として、子どもが主なプレイヤーであったこと、他のゲームの影響を指摘する。『UNO』の場合、公式ルールからはずれたローカルルールが広まり、本来の『UNO』とは別のゲームといってもよい現代日本の『UNO』が生まれたと指摘する。

質疑応答では、「これは口承文芸ではなく、口頭伝承の問題ではないか」という本質的な疑問が提示された。これは、例えばある地域の年中行事において同族の家に伝えられる家例（我が家では正月に餅を食べない等）の成立や中世公家社会における故実（ルール、約束事）の口伝と家説の形成にも通じる。いずれも口頭によるルールの伝承とローカルルールの派生の

問題だが、これら家例や口伝を含め、〈口伝えとその実践〉は口頭伝承論の普遍的な課題たり得るだろう。ただ、それを口承文芸として捉えることには検討の余地があるかと思われる。

【シンポジウム】 2025年6月1日（日）

シンポジウム「叙事詩の歴史と現在・未来」

北原 モコットウナシ（北海道）

本シンポジウムでは、まず坂井弘紀氏（和光大学）が「叙事詩が伝えてきたものは何か〜テュルクのノガイ大系をもとに」と題し、中央ユーラシアの叙事詩についての発表を行った。

「ノガイ大系」の名は、15〜17世紀のノガイ＝オルダに由来し、その有力者と系譜にまつわる歴史上の出来事を歌った叙事詩の一群を指す。遊牧民の間には7代遡る間の系譜が重ならない者を婚姻対象とする外婚制があり、他の集団との距離を測るために系譜が重視されることも紹介された。

ノガイ大系で描かれるものは、内訌、ロシアやカルマク（西モンゴル）との闘いが中心である。描写やエピソードには現実離れしてみえるものもあるが、ロシアの文献と符合する点もあり、テュルク諸民族の側から描かれた歴史・記憶を伝えるものとされる。

ノガイ大系を考えるポイントとして3点が挙げられた。まず、「チンギス統原理」のもとで、チンギス・カンの子孫が統治する王朝を多く生んだ地域に、チンギス・カンの子孫ではない者を主人公とする物語が数多く伝えられていることが目を引く。主人公が有力者を父、天女を母とするといった設定には、チンギス統原理に対抗する意図・効果がある。2点目は、近現代的な「民族」が形成される過程において、近隣諸国・諸民族との戦いをうたった叙事詩が、「民族意識」を形成しナショナル＝アイデンティティを高揚させた点。3点目は、同族や味方であっても、裏切ったり、敵に通じたり、義に反したりするものもいる。そのような「内なる敵」への警戒を叙事詩は促すという点である。

続いて熊野谷葉子氏（慶應義塾大学）は「叙事詩は過去をどう語るか イワン雷帝の歴史歌謡をめぐる」と題し、ロシアの叙事詩について発表した。

まず、過去を語るロシア語の叙事詩の類型としてブイリーナと歴史歌謡の説明がされた。ブイリーナは「在りし日のこと」を意味する。「キエフ歌圏のブイリーナ」は、想定される舞台としては9〜15世紀を描いた物語であり、様々な勇士が外敵と戦うなどの物語である。

「ノヴゴロド歌圏のブイリーナ」は、中世・14〜15世紀の物語で、大商業都市ノヴゴロドを舞台に、大商人・暴れ者、芸人などの活躍が中心である。これに対し、15〜19世紀が舞台となるものを「歴史歌謡」と呼ぶ。ただ、歌い手たちはどれも「歌」と呼ぶ。

次にブイリーナと歴史歌謡の数編を例に、文体・構成について述べられた。ブイリーナのテキストを見比べると、ストーリーは異なっている、よく似たテーマの連続となっているものが多いことに気づく。

歴史との関わりという点では、ブイリーナは史実との対応を推定することが困難であり、歴史歌謡には実在の人物が登場し、何らかの歴史的事実と結びついているという違いがある。

ブイリーナと歴史歌謡は近いものであるともいえ、歴史歌謡がブイリーナ化することもある

りうる。一例として、歴史歌謡に含まれる「雷帝の嫁とり」はブイリーナと共通するテーマが多く、ブイリーナが盛んな北ロシアに広まってブイリーナ化した。「雷帝と息子たち」も、様式的にはブイリーナに近づいている。これに対し「カザン占領」は、ブイリーナが北ロシアにはほとんど伝播せず、ブイリーナ化せずとどまったものだと考えられる。ブイリーナはフォーミュラを多用するため、個別性具体性が失われていく。歴史歌謡は、フォーミュラをそれほど使わず、舞台や登場人物などに個別具体性があることが述べられた。

コメンテータは藤井真湖氏（愛知淑徳大学）と丹菊逸治氏（北海道大学）が務めた。登壇者二人の発表を通してみると、歴史歌謡の「カザン陥落」はロシアから見た「タタールを倒した話」、タタールから見れば「チョラ・バトゥルを倒された話」であり、2つの叙事詩における「同件事象を双方の視点から語ったストーリー」であることが話題になった。また、モンゴル研究の「系譜」の観点からチョラ・バトゥルの物語を見ると、ロシア女性との間に生まれた子に殺される悲劇は、ロシア側に（変則的に）系譜を残した、とも解釈が可能であることが示された。

ディスカッションでは、史実とファンタジー要素の結びつき、現在における現地での受容のされ方と今後の可能性、未来に向けた教育の取り組みなどが紹介された。会場からも多くの発言があり、活発に意見が交わされた。



シンポジウム（報告）



シンポジウム（討論）

日本口承文芸学会 2025年度研究奨励賞 表彰式

5月31日（土）の総会において、今年度の研究奨励賞の表彰式が行われた。

受賞者：山本 紗綾 氏

論文：「汗かき地蔵」伝承の展開ー中世以前から現代へー

事務局便り

○受贈書籍

- ・原田信之『岡山県新見の伝説』法藏館 2024 年 3 月
- ・熊本大学文学部民俗学研究室『熊民叢書 17 長島民俗誌 薩肥の間に息づく暮らし』
2024 年 3 月
- ・井上真史『現代「ますように」考 こわくてかわいい日本の民間信仰』淡交社 2024 年 12 月
- ・日本民俗学会『日本民俗学』第 321 号 2025 年 2 月

○事務局が下記に移転しました

〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28

國學院大學文学部 立石展大研究室

Tel.: 03-5466-4460

E-mail: info@ko-sho.org

[日本口承文芸学会を広くご紹介下さい](#)

日本口承文芸学会への入会を希望なさる場合は、事務局にご連絡いただくか、学会 HP (<https://ko-sho.org/>) から入会申込書をダウンロードして、ご記入のうえお送りください。

入会金なし、年会費 4000 円です。郵便振替口座 00180-4-44834 をご利用下さい。